

曾川 1 号 遺 跡

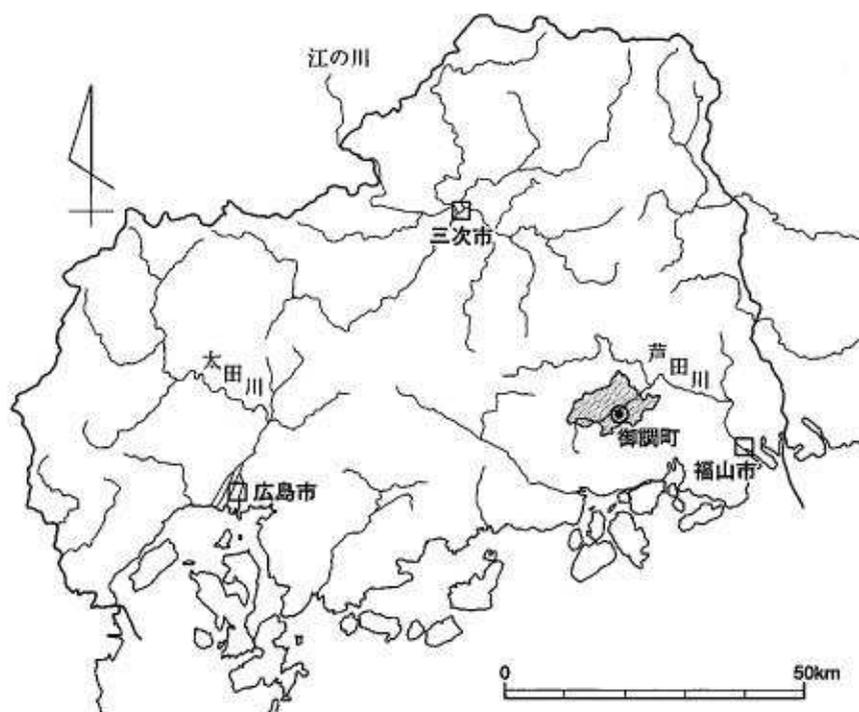
大町地区防火水槽設置事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 5

財団法人 広島県教育事業団

曾川 1 号 遺 跡

大町地区防火水槽設置事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書



御調町位置図 (●は遺跡を示す。)

2005

財団法人 広島県教育事業団

例 言

1. 本書は、平成16（2004）年度に実施した大町地区防火水槽設置事業に係る曾川1号遺跡（御調郡御調町大字大町所在）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、御調町（生活防災課）との委託契約により財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。
3. 発掘調査は梅本健治・山田繁樹が担当した。
4. 出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は、梅本が行った。
5. 本書は、梅本が執筆・編集した。
6. 本書に使用した遺構の略号は次のとおりである。
SD；溝状遺構，SK；土坑，SX；性格不明の遺構，P；柱穴
7. 挿図の遺物番号と図版の遺物番号とは同一である。
8. 本書に使用した北方位はすべて平面直角座標第Ⅲ座標系北である。
9. 第1図は国土交通省国土地理院発行の1:25,000の地形図（府中）を使用した。

目次

I	はじめに	(1)
II	位置と環境	(2)
III	調査の概要	(6)
IV	遺構と遺物	(7)
V	まとめ	(15)

挿図目次

第1図	曾川1号遺跡周辺遺跡分布図 (1:25,000)	(3)
第2図	周辺地形図 (1:2,000)	(6)
第3図	遺構実測図 (1) (1:60)	(9)
第4図	遺構実測図 (2) (1:30, 1:60)	(10)
第5図	出土遺物実測図 (1:2, 1:3)	(13)

図版目次

図版1	a 遺跡遠景 (西から)	図版3	a 南東壁土層 (北西から)
	b 遺跡遠景 (北西から)		b 北東壁土層 (南西から)
	c 遺跡遠景 (南東・ 牛の皮城跡から)		c 北西壁土層 (南東から)
図版2	a 調査前全景 (西から)		d 壺1出土状況 (北西から)
	b 調査後全景 (北西から)		e P1土層 (南東から)
	c 調査後全景 (北東から)		f 作業風景 (西から)
			g 作業風景 (北東から)
			h 作業風景 (北東から)
		図版4	出土遺物

I はじめに

曾川1号遺跡の発掘調査は大町地区防火水槽設置事業に係るものである。本事業は、調査区の西側に隣接して南北に走る中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴って大町地区の防火水槽を移設するものである。

御調町（生活防災課）は、平成15（2003）年12月18日、当該事業地内における文化財等の有無及び取扱いについて、御調町教育委員会（以下、「町教委」という。）と協議した。町教委と広島県教育委員会（以下、「県教委」という。）はこれを受けて現地踏査及び試掘調査を行い、平成16（2004）年1月5日に御調町に、事業地内において曾川1号遺跡を確認した旨を回答した。この遺跡の取扱いについて、県教委、町教委及び御調町は協議を重ねたが、設計変更による現状保存は不可能との結論に達した。その後、御調町は同年3月29日付けで「埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）」を県教委あてに提出し、県教委は同日付けで御調町あてに工事に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。これを受けて、御調町は同年3月30日付けで財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室（以下「教育事業団」という。）に曾川1号遺跡（55㎡）の調査依頼を行なった。御調町と教育事業団は同年4月1日付けで委託契約を結び、教育事業団は同年4月14日から4月28日までの2週間発掘調査を行った。

本報告書は、以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり、今後の埋蔵文化財の資料として、またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして、少しでも寄与できれば幸いである。

なお、発掘調査にあたっては、御調町生活防災課、御調町教育委員会及び地元の方々に多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

Ⅱ 位置と環境

曾川1号遺跡は広島県南東部に位置する御調郡御調町の東部に所在する。世羅台地の南東側に位置する御調町は東西16km、南北11.4kmと東西に長い町で、その中央を御調郡久井町に源を發した御調川が西から東に流れ、府中市南部で芦田川に合流する。この御調川沿いに幅500mほどの氾濫原に起因するごく狭い平野部がみられ、その両側には標高200～500m台の山塊が連なる。北岸には世羅台地最高所の宇根山（標高698.8m）から延びる標高400～500m台のやや高い山塊が、南岸にはこれらよりやや低い三原市・尾道市境の木頃山系を中心とする標高200～400m台の山々が並ぶ。御調川沿いに古代山陽道が東西に通り、南北には世羅郡世羅町・甲山町を中心とする中世莊園の高野山領太田莊とその倉敷地である尾道を結ぶ街道（出雲街道）が南北に貫き、これら2つの街道は町中心部の市で交わる。このように、御調町は古代から中世にかけて交通の要衝として栄え、本郷平廃寺跡や古墳など多くの文化財が残されている。発掘調査例はあまり多くないが、以下において御調町の歴史的環境について概要を述べる。

縄文時代 この時期の遺構はみつかっていないが、曾川1号遺跡（P4）⁽¹⁾では縄文時代後期の土器が比較的まとまって出土している。

弥生時代 調査例は少なく、曾川1号遺跡（P1・2）⁽²⁾の調査で弥生時代後期～終末の竪穴住居跡や土器棺墓を検出している。そのほか、御調川北岸の丘陵部を中心に弥生土器や磨製石斧の表面採集例が多く知られている。今田の北山遺跡や本郷平廃寺跡から中期の土器がみつまっているが、採集された土器の大半は弥生時代後期のものである。

曾川1号遺跡の北西側7kmの御調川北岸の丘陵上にある貝ヶ原遺跡⁽³⁾では、古式の様相をもつ特殊器台形土器が出土しており、吉備地域中枢との関わりが考えられている。

古墳時代 御調町には多くの古墳が存在するが、調査例は少ない。古墳は御調川の両岸、特に北岸の丘陵を中心に分布する。町の中心である市周辺の高尾・徳永・綾目・貝ヶ原に多く分布するが、そのほか町西部の三原市八幡町との境に近い丸門田・丸河南、そのさらに上流の津蟹・野間、また北の久井町・甲山町と境を接する山間部の大山田などにも分布している。

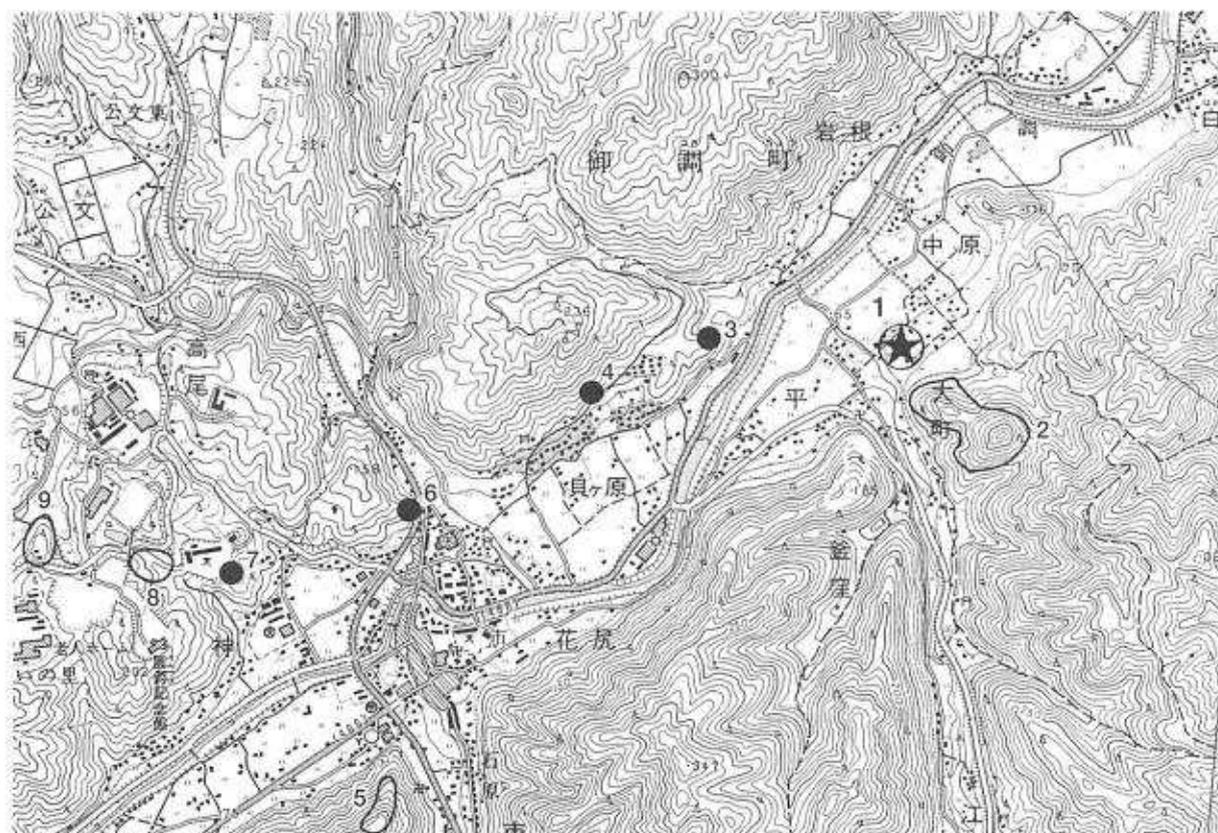
竪穴系の埋葬施設をもつものはそれほど多くないが、津蟹の天神山第2号古墳、丸門田の明神山古墳群（8基）・明神山古墳、徳永の高神古墳群（3基）・正尺山古墳群（2基）、高尾の高尾第1号古墳⁽⁴⁾・高尾西第3・4号古墳、市の後口山古墳⁽⁵⁾などがある。天神山第2号古墳は竪穴式石室だが、ほかはいずれも箱式石棺と考えられている。高尾第1号古墳・後口山古墳は発掘調査が行なわれている。前者は直径13.5m、高さ1.5mの円墳の裾に1～2段の葺石を巡らし、内法の長さ170cmの箱式石棺から人骨が出土している。後口山古墳は内法の長さ170cmの箱式石棺のなかから、人骨と管玉・ガラス小玉が出土している。両古墳ともに5世紀末前後に築造されたと考え

られている。

町内の古墳の多くは横穴式石室を埋葬施設とする。中心部の高尾の高尾西第1・2号古墳，神古墳群（2基），綾目の矢伝古墳群（3基）・七つ塚古墳群（6基），神の神西古墳群（2基），貝ヶ原の貝ヶ原古墳群（7基）・蜈蚣岩山口古墳群（5基），西部の津蟹の隠れ迫古墳群（3基）・城山古墳群（4基）・要谷山古墳，野間の小石古墳群（3基），丸門田の城の東古墳・船岩古墳・市山古墳群（2基）・東中倉古墳群（2基），丸河南の大羽谷古墳群（2基），北部の大山田の梅ノ木古墳群（4基）・小猿古墳・中倉谷古墳・大畑谷古墳，東部の本の狐岩古墳群（6基）・河崎古墳などがある。

古墳以外では，須恵器を焼成した津蟹の隠れ迫窯跡がある。また，曾川1号遺跡（P1・2）¹⁶⁾では，古墳時代の堅穴住居跡や溝などを検出している。

古代 「和名抄」所載の古代御調郡7郷のうち，「伯多郷」（現・白太に比定）と「者度郷」（現・市に比定）の2郷が御調町内に比定される。御調川に沿って古代山陽道が通り，市付近に「者度駅」が存在したのではないかと考えられている。また，御調川沿いの平野には条里制の遺構が多く認められる。平安時代末から鎌倉時代初頭頃には，御調川沿いを中心にいくつかの荘園



第1図 曾川1号遺跡周辺遺跡分布図 (1:25,000)

- | | | | |
|----------|---------|-----------|----------|
| 1 曾川1号遺跡 | 2 牛の皮城跡 | 3 貝ヶ原遺跡 | 4 貝ヶ原古墳群 |
| 5 雲雀城跡 | 6 後口山古墳 | 7 高尾第1号古墳 | 8 高尾西古墳群 |
| 9 七つ塚古墳群 | | | |

が成立している。いずれも町域の西半に存在したと考えられ、御調川北岸を主体とする神村荘（石清水八幡宮宝塔院領）、御調本北条（河北荘）、南岸の御調南条荘（河南荘）、三原市八幡町にかけての御調別宮（石清水八幡宮領）などが知られる。

この時期の遺跡としては、寺院跡・墓・窯跡などがある。丸門田の本郷平廃寺跡⁽⁷⁾は町西部の御調川北岸にある低丘陵端部の緩斜面に築かれた白鳳時代～奈良時代の寺院跡である。昭和60～63（1985～1988）年の4次にわたる発掘調査で、北に金堂跡、南に塔跡を配する四天王寺式に類した伽藍配置であることが明らかになった。石川寺式の軒丸瓦をはじめ、埴や塑像片などが出土している。前面に古代山陽道を望み、安芸国境にも近いという交通の要衝に立地していることから、造営の背景には中央政権と密接な関係を持つ勢力の存在が窺われる。この他、須恵器の骨蔵器を納めた丸門田の合山火葬墓や須恵器・瓦を焼いた津蟹の切堤窯跡群などがある。

中世 中世の御調町は、北の世羅郡甲山町・世羅町を主な荘域とする高野山領荘園の太田荘との関わりの中かで始まる。太田荘から高野山への物資の輸送のためなどに頻繁に使われた街道がほぼ現在の国道184号にあたり、御調町の市を通過して尾道に到る。尾道には太田荘の物資などを保管する倉敷地が存在したが、平安時代末期にはこの尾道の倉敷地設置に関して、御調南条荘が尾道村の押取行為に出て、訴訟沙汰を起こしている。また、13世紀末に太田荘預所の僧淵信が尾道に年貢を運ぶ途中で「和市の法」（相場）を減じて利益を着服したとされるのは御調町の市において、中世において当地域の経済的な中心地であった可能性が高い。しかし、南北朝時代以降、領主の高野山や地頭三善氏の支配力が弱体化するのに伴って、太田荘は守護や在地武士などの押領の対象となり、次第に当地域への周辺諸勢力の侵攻が繰り返されるようになる。御調町周辺には、洪川氏・木梨杉原氏・高須杉原氏などの勢力があったが、15世紀末の応仁の乱を契機に備後北部の三吉氏が南下し、御調町を勢力下に置いた。しかし、御調町が三吉氏の勢力下にあったのはそれほど長い期間ではなく、大永6（1526）年頃には尼子氏の南下や大内氏の侵攻によって、再び周辺諸勢力による抗争が激化した。そして、尼子・大内氏の滅亡を経て、中国一円の領主となった毛利氏に周辺の中小勢力の多くは服属していった。

中世の遺跡としては、山城跡・古墓などがあるが、発掘調査が行われたものは少ない。

山城跡では、大町の牛の皮城跡⁽⁸⁾・植野の末近城跡⁽⁹⁾の発掘調査が行われている。御調川を北西に望む丘陵上に築かれた牛の皮城跡は、北郭群（標高約170m）と南郭群（標高約230m）からなり、北郭群の調査が行なわれた。北郭群は北西—南東方向に連なる5段の郭群を中心に、その北西側前面に放射状に配置された14本の堅堀群、南東側背後に2条の堀切、そして北東側面に9条、南西側面に1条の堅堀を配している。郭群からは土師質土器・陶磁器・鉄釘などのほか、鎧の部品である小札約10点が出土している。末近城跡は町西部の御調川支流野間川を東に望む丘陵上に築かれた単郭の城で、主郭の北東に帯郭、北西側に堀切を配する。この城跡は軍事的拠点としてよりも、「村の城」（村民の共同施設）としての機能がより強いと考えられている。なお、主郭などから戦国期の墓坑11基が検出されている。山城跡としてはこの他に、市の雲雀城跡、丸門田の丸山城跡、今田の上田城跡、津蟹の福丸城跡などがある。

山城跡以外では、一辺5.3mの方形石積基壇に宝篋印塔・五輪塔を安置した大原の仏谷古墓、丸門田の浄土寺跡、発掘調査で16世紀以前の掘立柱建物跡1棟を検出した千堂の上千堂遺跡がある。

註

- (1) 平成15(2003)年度に財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施した。
- (2) 平成14(2002)年度に財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが、平成15(2003)年度に財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室がそれぞれ発掘調査を実施した。
- (3) 潮見 浩「貝ヶ原遺跡出土の特殊器台形土器」広島県教育委員会『広島県文化財調査報告』第17集 1991年
- (4) 御調町教育委員会『御調郡御調町高尾古墳発掘調査報告 付 御調町後口山古墳発掘調査概報』 1971年
- (5) 註(4)に同じ。
- (6) 註(2)に同じ。
- (7) 御調町教育委員会『本郷平麿寺—昭和60年度発掘調査概報—』 1986年
御調町教育委員会『本郷平麿寺—昭和61年度発掘調査概報—』 1987年
広島大学文学部(潮見 浩)編『本郷平麿寺』広島県御調町教育委員会 1989年
- (8) 註(2)に同じ。
- (9) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『末近城跡』 2002年
- (10) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『上千堂遺跡』 1997年

参考文献

- ・後藤陽一監修『広島県の地名』 平凡社 1982年
- ・中国新聞社編『広島県大百科事典』上巻 1982年
- ・広島県『広島県史』中世 通史Ⅱ 1984年
- ・土井作治監修『図説尾道・三原・因島の歴史』 郷土出版社 2001年

Ⅲ 調査の概要

曾川1号遺跡は御調町東部の、東流する芦田川支流御調川の南岸に位置する弥生時代後期から古墳時代にかけての集落跡である。御調川の南北両岸には標高200～300m台の山塊が連なり、川沿いに幅200～500mほどの狭小な平野がみられる。遺跡付近の北岸は川岸まで山塊が迫るが、南岸には幅500mほどの沖積地と緩斜面が広がる。本遺跡は川岸から南東350mの緩斜面に立地する。調査区の現状は畑地である。西側は中国横断自動車道尾道松江線の路線に接している。平成14(2002)年度以降、その橋梁の橋脚や側道の工事に伴い曾川1号遺跡の発掘調査が行われている。

調査は、重機(0.28㎡のミニ・バックホー)によって厚さ1m余りの表土を除去したのち、遺構精査と遺構掘り下げを行なった。検出した遺構の内訳は、溝状遺構5条(SD1～5)、土坑3基(SK1～3)、性格不明の遺構3基(SX1～3)、柱穴23個である。55㎡と小面積の調査のため、柱穴と溝状遺構(壁溝)の対応関係が不明確だが、4軒の竪穴住居跡の存在が考えられる。報告遺物19点の内訳は、弥生土器15点(壺3・甕7・高杯3・低脚杯1・台付鉢1)、土師器1点(壺)、土師質土器2点(杯・椀)、鉄器1点(用途不明品)である。



第2図 周辺地形図(1:2,000)

Ⅳ 遺構と遺物

調査区は南西—北東方向7m、北西—南東方向6mのほぼ正方形で、遺構面まで約1mの深さである。遺構面は東隅が高く、西隅に向って緩やかに傾斜しており、その高低差は1.2mである。遺構は、溝状遺構・土坑・性格不明の遺構・柱穴を検出した(第3・4図、図版2・3)。

(1) 竪穴住居跡 溝状遺構のうちSD1を除く4条(SD2～5)は住居跡の壁溝と考えられ、柱穴の配置状況から考えて、調査区の西隅付近に1軒(SD2と柱穴群)、東隅を中心とする調査区南東半に3軒(SD3～5と柱穴群)の計4軒の竪穴住居跡が存在するものとみられる。各壁溝(溝状遺構)と柱穴の対応関係は明確にしえないので、ここでは各溝状遺構と主要な柱穴について個別に記述する。

①SD2 北西壁寄り中央付近にある溝状遺構で、北西—南東方向に緩い曲線を描き、北西側調査区外に延びる。現状の規模は、長さ1.36m、最大幅17cm、深さ(最大)13cmで、溝底面は平坦である。このSD2に対応する柱穴としてはP1～P3が考えられる。ただ、SD2の検出面とP1～P3の検出面は、後者が30cmあまりも低い。SD1の西側が20～30cm下がっているが、後述するように、SD1はより新しい時期のものであるから、SD1によって壊された壁溝あるいは住居壁が存在した可能性があり、そうするとSD2とP1～P3の柱穴群は別々のものの可能性も出てくる。明確ではないが、ここでは一応両者は関わりがあるものとして、捉えておく。柱穴の規模は、P1が径34cm、深さ45cm、P2が長径35cm×短径33cm、深さ49cm、P3はSD1によって壊されており、現状の規模は長径32cm×短径29cm、深さ37cmである。P1・P2の柱間距離は1.68mである。P1・P2ともに柱痕跡を検出しており、P1が径10cm、P2が径17～20cmの太さの柱材を用いている。

②SD3 調査区南東半の北東壁寄りで検出した溝状遺構で、調査区中央から曲線を描いて南東方向に延び、調査区外に出る。現状の規模は、長さ3.56m、幅22～69cm、深さ(最大)15cmで、溝底面は平坦である。今回検出した溝状遺構のなかではSD1と並んで規模が大きい。南東部では北東側に最大20cmの住居壁と思われる立ち上がりが見られる。SD3の南西側の床面と思われる平坦面には10個程度の対応する可能性のある柱穴が掘り込まれている(P5～P10・P12～P14)。これらの柱穴の規模は、P5が長径31cm×短径24cm、深さ37cm、P6が長径24cm×短径22cm、深さ53cm、P7が長径30cm×短径27cm、深さ41cm、P8が径40cm、深さ60cm、P9が長径43cm×短径38cm、深さ46cm、P10が径25cm、深さ38cm、P12が径42cm、深さ46cm、P13が長径35cm×短径33cm、深さ45cm、P14が長径29cm×短径28cm、深さ24cmである。P14は浅いが、ほかはほ

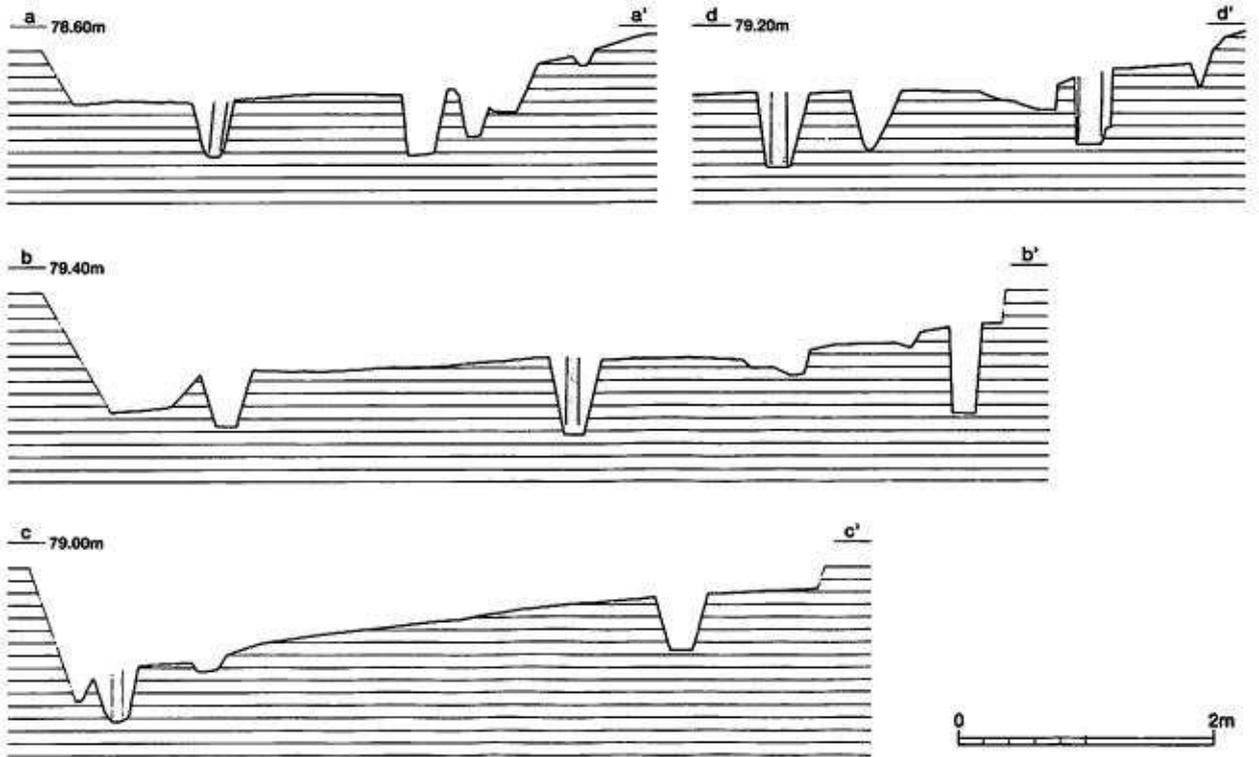
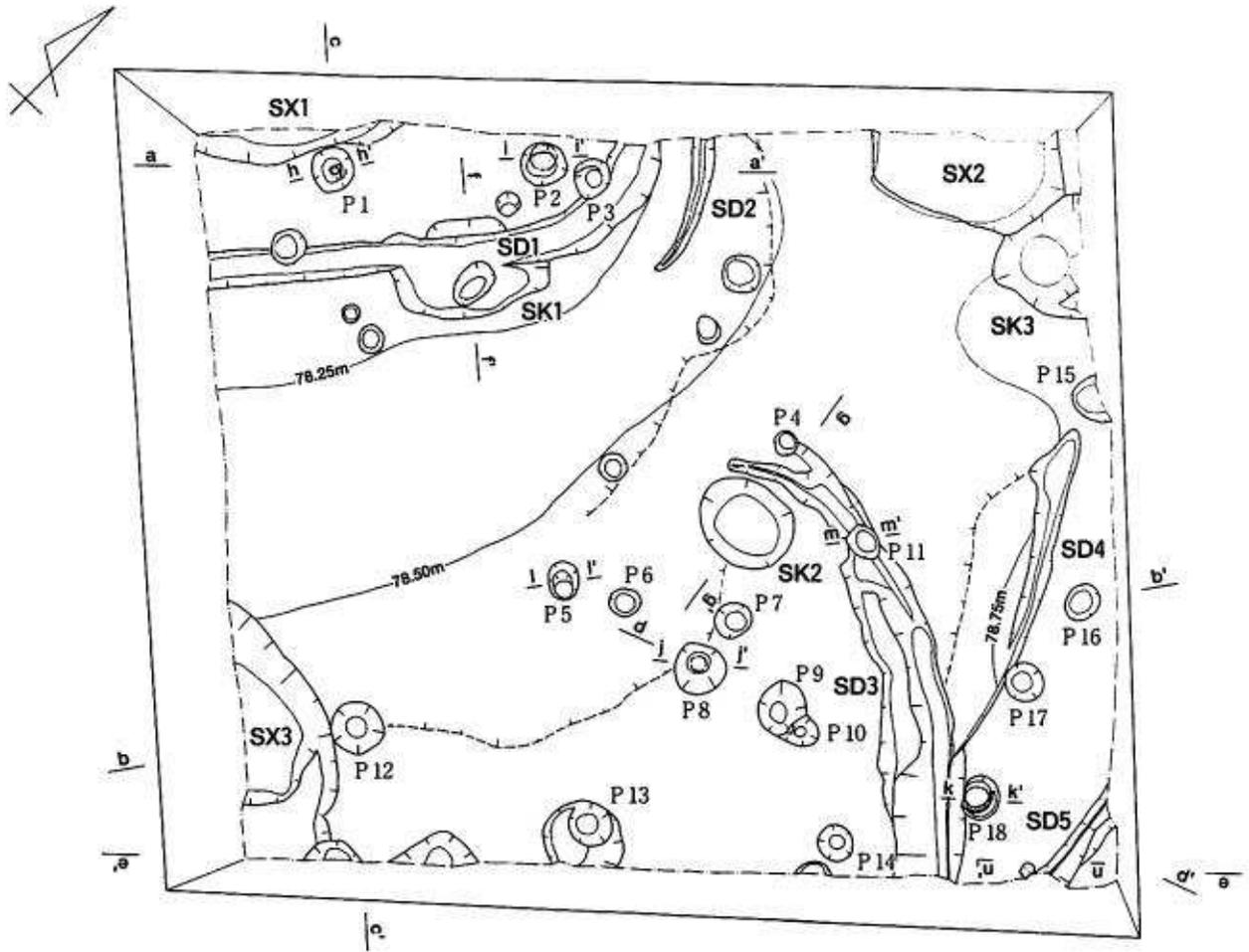
径30～40cm台、深さ30～40cm台の規模である。P 5では底面に10cm大の角礫2個を置いて根石とし、P 8では径13cmの柱痕跡を検出した。なお、S D 3からは弥生土器・甕底部(11)が、ほかの柱穴と離れて南隅に孤立的に存在するP 12からは用途不明鉄器(19)と弥生土器・甕口縁部片(5)がそれぞれ出土した。

③S D 4 S D 3の北東側に近接してみられる溝状遺構で、ごく僅かに西に湾曲するがほぼ南北に直線的に伸び、南端部はS D 3によって壊されている。現状の規模は、長さ1.8m、幅11～33cm、深さ(最大)5cmとごく浅く、溝底面は平坦である。南端は削平されて溝状ではなくなり、東側の立ち上がりのみが残っている。溝の東側は最大15cmの立ち上がりが認められ、住居壁の残存と考えられる。溝の西側には最大幅50cmほどの平坦面が認められ、床面の残存とみられる。S D 4の西側に対応する柱穴が存在するはずであるが、明確にはしえない。既述のP 5～P 10のほかに、S D 3と重複しているP 4・P 11なども可能性がある。P 4は長径19cm×短径17cm、深さ46cm、P 11は長径29cm×短径22cm、深さ53cmの規模である。いずれも平面規模は小さいが、深い。P 11の底面には7～8cm大の角礫1個が置かれており、根石とみられる。

④S D 5 調査区東隅にごく僅かに認められる溝状遺構で、現状の規模は長さ0.92m、幅20～25cm、深さ(最大)18cmで、溝底面は平坦である。横断面形はV字状をなしている。最大27cmの壁の立ち上がりが溝の東側にみられ、住居壁の残存と考えられる。S D 5の西側には平坦面がみられ、住居の床面と考えられる。S D 5に伴う床面はS D 3の覆土のうえに乗っており、S D 5を壁溝とする竪穴住居跡はS D 3を壁溝とする竪穴住居跡に較べて新しい。このS D 5に伴う可能性のある柱穴としては、P 16～P 18をはじめ、少し北に離れるがP 15や既述のP 4～P 11・P 13・P 14などが考えられる。最も可能性が高いP 16～P 18、さらにはP 15の規模は、P 15が径39cm、深さ55cm、P 16が長径31cm×短径26cm、深さ70cm、P 17が長径31cm×短径29cm、深さ44cm、P 18が長径36cm×短径29cm、深さ60cmである。径30cm台、深さ44～70cmとほかの柱穴に較べて深い。P 18では径14～18cmの柱痕跡を検出した。なお、南東壁際の床面直上で土師器・壺(1)が出土した。

(2) 溝状遺構 S D 1は調査区西隅付近にあり、現状の長さ3.77m、幅23～41cm、深さ(最大)39cm(北端部)で、溝底面の高低差は9cmと南西端が高く北東端が低いもののほぼ平坦といえる。中央付近でS K 1を壊している。S D 1の覆土は黒色土で、集落跡の遺構の覆土が暗褐色土主体であるのと異なる。なお、このS K 1と重複する辺りの覆土から土師質土器2点(椀17・杯18)が出土した。これらから、S D 1は中世に掘り込まれた溝状遺構と考えられる。

(3) 土坑 西隅近くのS D 1と重複するS K 1、調査区中央のS D 3北西端近くにあるS K 2、北隅のS X 2と一部重複するS K 3の3基がある。

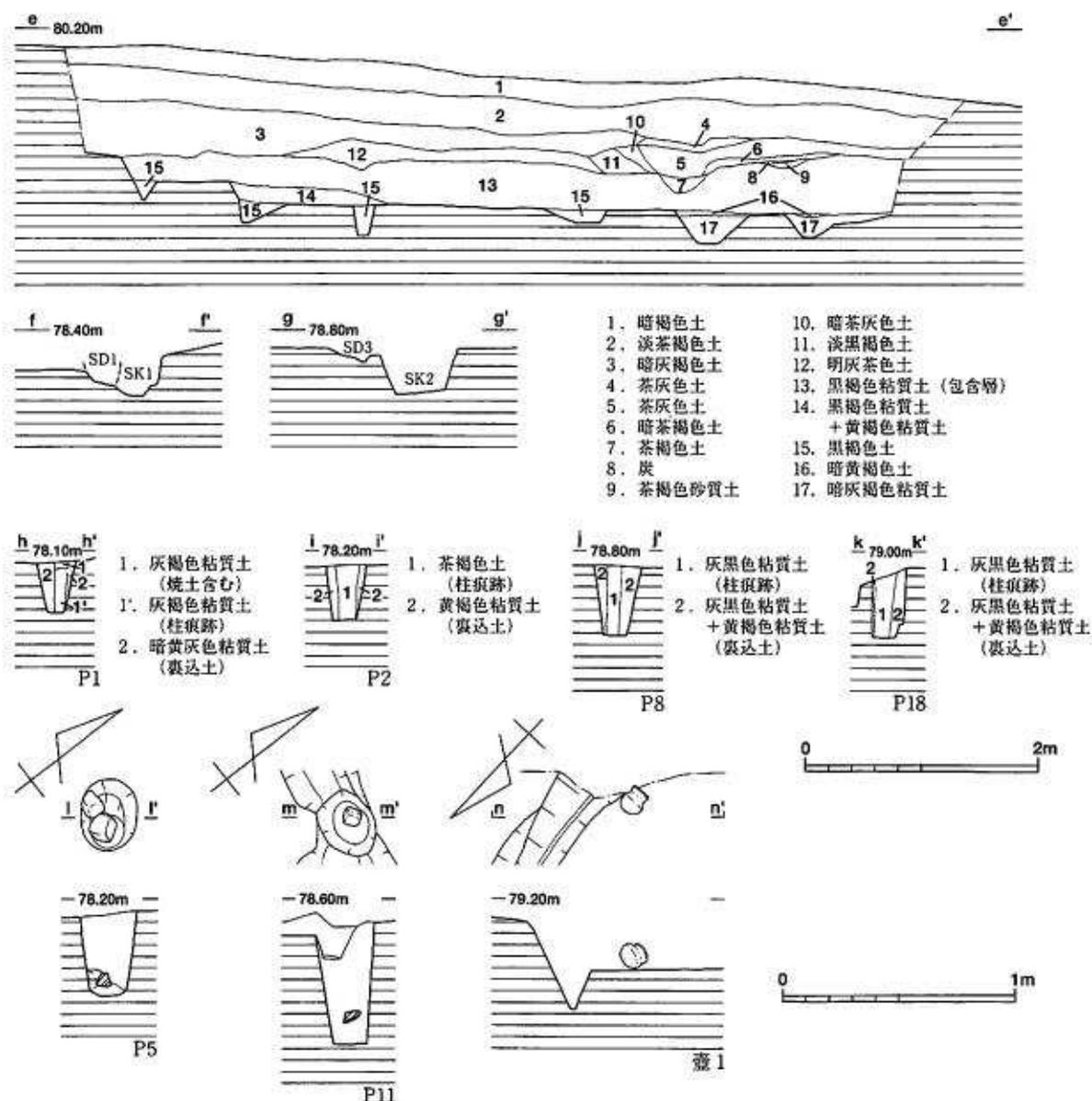


第3図 遺構実測図 (1) (1:60) (アミ目は柱痕跡を示す。)

①SK1 中世の溝状遺構SD1によって壊されている。平面形は南西—北東方向に長軸をもつ長方形で、長さ128cm、幅（最大）79cm、深さ（最大）27cmである。坑底面はほぼ平坦で、中央付近に39cm×26cm、深さ9cmの楕円形の浅いピットがある。出土遺物はない。

②SK2 平面形はほぼ東西方向に長軸をもつ楕円形で、規模は長径80cm×短径64cm、深さ35cmである。坑底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

③SK3 北隅の北東壁際にあり、半ばは調査区外に出ている。現状の規模は99cm×70cm、深さ34cmで、平面形は不整形である。西側でSK2と部分的に重複している。出土遺物はない。



第4図 遺構実測図(2) (1:30, 1:60)

(4) 性格不明の遺構 3基あるが、いずれも調査区の壁際にあり、調査区外に延びており、全容はつかめない。S X 1は西隅近くの北西壁際に、S X 2は北隅近くの北西壁際に、S X 3は南隅近くの南西壁際にそれぞれある。

①S X 1 大半が調査区外に出ている。調査区の最も低い個所にあり、現状の規模は165cm×30cm、深さ34cmである。出土遺物はない。

②S X 2 平面形は方形状で、南壁はややオーバーハングしている。現状の規模は、153cm×74cm、深さ29cmで、出土遺物はない。

③S X 3 二段掘りになっており、北側が深い。平面形は不整形形状で、205cm×73cm、深さ35cmの現状規模である。出土遺物はない。

(5) 出土遺物 (第5図1～19, 図版4) 図示しえた遺物は計19点で、内訳は弥生土器(壺・甕・高杯・低脚杯・台付鉢)15点、土師器(壺)1点、土師質土器(碗・杯)2点、鉄器(用途不明品)1点である。遺構に伴うものは、1の土師器・壺、5の弥生土器・甕口縁、11の弥生土器・甕底部、17の土師質土器・碗高台、18の土師質土器・杯、19の用途不明鉄器の計6点にすぎない。1はS D 5を壁溝とする住居床面直上(南東壁際)、5・19は南隅に近いP 12、11はS D 3、17・18はS D 1からの出土である。残りの13点は遺構には伴わず、調査区内出土である。

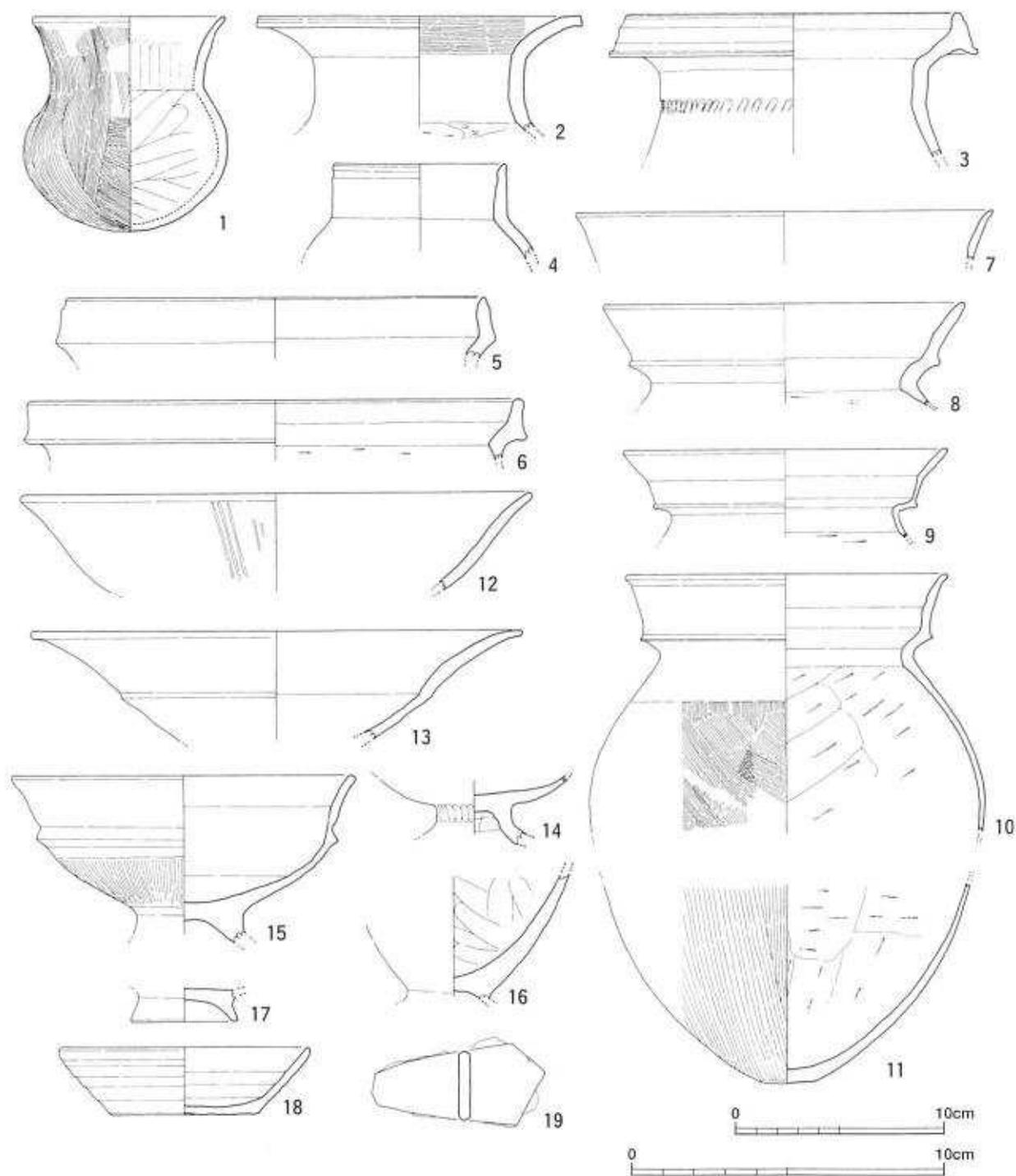
①弥生土器(2～16) 計15点で、内訳は壺3点(2～4)、甕7点(5～11)、高杯3点(12～14)、低脚杯1点(15)、台付鉢1点(16)である。

2～4は壺である。2は比較的良好に締まった頸部から直立し、半ばから強く折れて水平に近く外上方に伸びた口縁部の端部を平坦に納める。調整は、外面が横ナデ、口縁端面には浅い凹線1条を施す。内面は、口縁の上半が横方向の粗いハケ目(8条/cm)、下半の直立部分はヘラ状工具によるミガキかあるいは丁寧なナデ、僅かに残る体部には横方向のヘラケズリが認められる。復元口径15.4cmで、色調は表面が暗褐色、胎土部分が淡褐色である。3は緩やかに窄まる頸部から直立し、途中で強く屈曲して外上方に直線的に伸びた口縁の端部を上下に拡張し、端部を丸く納める。下方向への拡張が大きく、端部を少し外方に曲げている。調整は、拡張した口縁端面に3～4条の凹線、外面は横ナデで、頸部に斜位の連続刺突文を施す。内面は、口縁上半が横ナデ、直立する下半は硬質の工具によるナデかミガキ、体部は器壁の損耗により調整は不明である。復元口径15.6cmで、色調は表面が橙褐色、3mm大以下の砂粒を多く含む胎土は暗黄褐色である。4はやや強く窄まった頸部から直立するやや先細り気味の口縁の端部を丸く納める。調整は、外面と内面口縁部が横ナデ、体部内面は横方向のヘラケズリを施している。復元口径8.1cmで、色調は淡黄褐色、胎土は1mm以下の砂粒を比較的多く含む。

5～11は甕である。5はP12から出土したもので、開いた擬口縁から内傾気味に直立する口縁の端部を尖り気味に納める。調整は内外面共に横ナデで、外面の口縁端部近くにごく浅い凹線状の調整がみられる。復元口径19.9cmと大型で、色調は淡褐色、比較的精良な胎土である。6も復元口径23.7cmと大型品の口縁部で、頸部で屈曲して外上方にやや湾曲気味に延びたあと端部を上下に拡張させ、広い端面を緩く凹ませている。口縁端部の拡張は上方に長く、下方へはごく短い。調整は、内面体部には横方向のヘラケズリを施すが、その他はいずれも横ナデである。口縁部内面中央には接合痕が明瞭に残る。色調は暗褐色である。7～10は山陰系の複合口縁の甕である。頸部でやや強く屈曲したあと外上方に短くのびた擬口縁端部から開き気味に立ち上がる口縁部がつく。7・9・10のように器壁が薄手のものと8のようにやや厚い器壁のものがある。また、口縁の立ち上がりも、8・9はかなり開き気味だが、10は直立に近い。8は直線的に口縁が延びて、端部をやや尖り気味に納める。9は最初直立気味に延びた口縁が途中で折れてより強く開いている。10は先細り気味の口縁がいくらか外湾気味に立ち上がり、端部で少し外方に屈曲させ、端部は丸く納めている。8～10はいずれも口縁を擬口縁端部の少し内側に接合しているために、擬口縁端部が突出し稜を形成している。9・10の稜は細く鋭いが、8のそれはやや太く鈍い。7は擬口縁以下を失っていると思われる。調整は、内外面ともに横ナデである。復元口径19.9cmで、淡黄褐色の色調である。胎土は比較的精良である。8は復元口径17.2cmで、色調は淡橙色である。調整は、外面全体と口縁部内面は横ナデ、擬口縁部内面は横方向のナデつけ、体部内面は横方向のヘラケズリを施す。9は復元口径15.2cm、淡褐色の色調である。調整は、外面から口縁部内面にかけて横ナデ、体部内面は横方向のヘラケズリを施す。10は口縁部から体部上半にかけての比較的大型の破片で、調整は、外面が口縁部から肩部にかけて横ナデ、体部が縦方向のハケ目のち斜め方向のハケ目を施す。これらのハケ目は同じ単位で、10条/cmと細かく密である。内面は、口縁部上半が横ナデ、口縁部下半から頸部にかけて丁寧なナデつけ、体部は横・斜め方向のヘラケズリを施している。復元口径15.2cm、復元体部最大径18.8cmで、色調は淡褐色である。胎土は比較的精良である。外面の口縁部と体部最大径部付近を中心に暗褐色のススの付着がみられる。11は底部片で、径2.6～3cmとごく小さな平底が認められる。調整は、外面が縦方向のヘラミガキ、内面は縦方向主体のヘラケズリを施す。外面全体に黒色のススが顕著に付着している。淡褐色～暗褐色の色調で、1mm内外の砂粒を比較的多く含む。11はSD3からの出土である。

12～14は高杯である。12は復元口径24.2cmで、やや内湾気味に外上方に延びて、途中で緩く外反した口縁の端部を丸く納める。調整は、内外面ともに横ナデだが、外面には一部縦方向のヘラミガキが残る。色調は橙褐色で、比較的精良な胎土である。13は復元口径22.4cmで、外上方に直線的に延びる体部に緩やかに外反するやや厚い器壁の口縁部がつく。口縁端部は丸く納める。外面の体部と口縁部の境には口縁側にごく緩やかな段差をもつ稜が形成されている。体部内面は調整不明、その他は横方向の細かいヘラミガキと考えられるが、明確ではない。14は丸みが強く深い杯部に短脚をもつもので、台付鉢の可能性もある。内湾しながら外上方に延びる体部にやや外反気味に直立する口縁部がつく。口縁端部は丸く納める。外面の体部と口縁部の接合部は上下に

段差をもった断面三角形の突帯状の鋭い稜を形成する。筒状で中空の太い脚部は接合法により体部とつながる。調整は、外面の口縁部から稜下部にかけて横ナデ、体部は縦方向の密なハケ目(10条/cm程度)、脚部は横ナデである。内面は、口縁部上半が横ナデ、口縁部下半から体部上半にかけて横方向のヘラケズリ、体部下半から内底面にかけて丁寧なナデを施している。脚部内面は調整不明である。口径16.1cmで、色調は淡橙色である。胎土は1mm内外の砂粒を比較的多く



第5図 出土遺物実測図 (1:3, 1:2) 1~18;土器 19;鉄器

含む。

15は低脚杯である。杯部下半から脚部上半にかけての破片で、杯部は平坦な底部、脚部は途中で強く屈曲する形態である。調整は、内底面はミガキ状、杯部外面はヘラナデ、直立する脚基部外面は指頭による連続的なナデつけ、脚部はナデつけ、脚部内面は杯部外面がナデつけ、脚基部は未調整、脚柱部は横ナデをそれぞれ施している。色調は表面が黒褐色ないし淡褐色、胎土は暗褐色で比較的精良である。

16は台付鉢である。ごく小さな中空の踏ん張る形態の台部に内湾気味に立ち上がる深い鉢部がつく。調整は、鉢部内面は粗い横・斜め方向主体のミガキ状、外面・台部内面は調整不明である。色調は淡黄褐色で、胎土は比較的精良である。

②土師器（1） 完形品の小型壺で、口径9.0cm、体部最大径9.8cm、器高10.3cmである。SD5を壁溝とする住居床面直上から出土した。やや扁球気味の丸底の体部から緩やかに窄まり頸部となる。頸部から幾分湾曲しながら外上方に立ち上がって、口縁端部を丸く納める。調整は、外面は口縁部が横ナデののち縦方向の細かいハケ目（14～15条/cm）、体部は口縁部と同じ単位のハケ目を横方向に施したあと、縦方向に施す。底面中央でこれらの縦方向のハケ目が収束している。内面は、口縁部が横ナデ、口縁部下半は頸部にかけて縦方向の指頭によるナデつけののちに横ナデを施す。体部は斜め及び横方向主体のやや乱雑なヘラケズリを行なう。黄褐色の色調で、胎土は比較的精良である。

③土師質土器（17・18） 椀高台（17）、杯（18）各1点がある。いずれもSD1から出土した。

17は椀の高台片で、やや外傾気味に直立する高台の端部を丸く納める。調整は、器壁の損耗のため不明である。高台径4.9cmで、淡黄褐色の色調である。胎土は精良である。18は杯で、平底に直線的に外上方に延びる口縁の端部を丸く納めている。調整は、内底面及び体部内外面は回転ナデ、外底面は回転糸切り離しで、板目痕が明瞭に観察される。復元口径11.9cm、復元底径7.2cm、器高3.2cmである。色調は、体部上半から口縁にかけて淡黄褐色、体部下半から底部にかけて灰黒色である。胎土は精良である。

④鉄器（19） P12から出土した用途不明品である。平面形不整長方形で、5.4cm×2.6cm、厚さ0.4cmである。

V ま と め

曾川1号遺跡は東流する芦田川支流御調川南岸の緩斜面に立地する弥生時代後期から古墳時代にかけての集落跡である。今回の調査は防火水槽移設に伴ったもので、調査区の西側を中心に広がる遺跡のごく一部の調査であり、ここでは検出した遺構と出土遺物について竪穴住居跡を中心に若干の検討を加えることでまとめにかえたい。

今回の調査では、竪穴住居跡4軒などを検出した。しかし、いずれも部分的な検出であり、壁溝と考えられる溝状遺構と床面、柱穴を検出したに過ぎず、壁溝と柱穴の具体的な対応関係は明らかにできなかった。また、出土遺物についても、報告遺物計19点のうち、竪穴住居跡を構成する壁溝や柱穴に伴って出土したものは数点にすぎない。

壁溝(SD2~5)の平面形から、SD2・3は円形、SD4・5は方形あるいは隅丸方形の平面形をした住居の可能性が考えられる。また、SD3~5については重複しており、SD5(新)>SD3>SD4(古)のような新旧関係が明らかである。また、出土遺物のなかでは、甕底部片11がSD3から、完形の小型丸底壺1はSD5を壁溝とする住居跡床面直上で出土した。SD2・4に伴う遺物は出土していない。SD3に伴う甕底部片はごく狭い平底をもつものの丸底化の傾向がみられることなどから、弥生時代終末期頃のものと考えられる。SD5に伴う土師器・小型壺は丸底で、頸部が不明瞭で体部から口縁部にかけていくらか鈍重な感じを与える形態などから、古墳時代中期頃のものと考えられる。

図示した土器は、この土師器・壺と2点の土師質土器を除くと、壺3と甕口縁部6が弥生時代後期中葉とやや古い様相を示すものの、その他はいずれも庄内式併行期を中心とした弥生時代終末期頃のもの⁽¹⁾と考えられる。また、山陰系の複合口縁の甕(7~10)の存在も特筆されるもので、特に擬口縁と口縁の接合部の稜が鋭い10は搬入品の可能性がある。山陰地域との交流を考える上で貴重な資料といえよう。

今回の調査では、以上のように弥生時代終末期を中心とした集落跡のごく一部を検出したが、曾川1号遺跡の総合的な検討は、中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う発掘調査の報告時になされるものと期待される。

註

(1) 弥生時代後期~古墳時代初頭の土器編年の検討には主に以下の文献を参考にした。

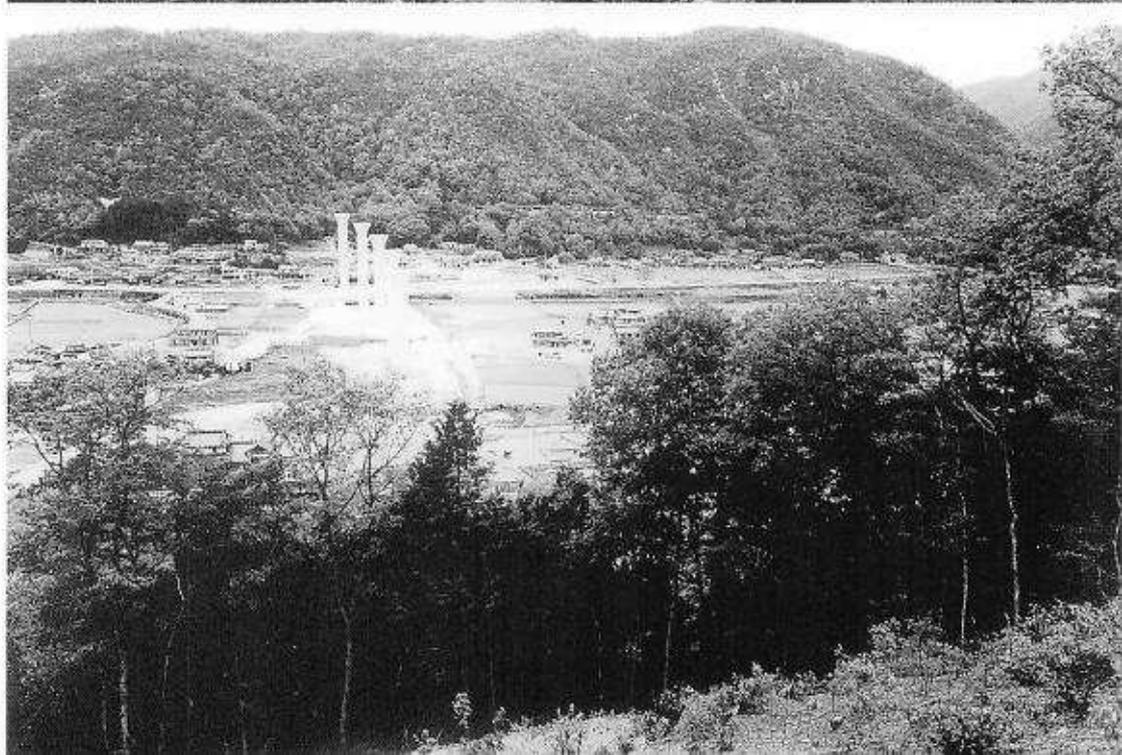
- ① 正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社 1992年
- ② (財)大阪府文化財センター『古墳出現期の土師器と実年代 シンポジウム資料集』 2003年
- ③ 次山 淳「土器からみた諸変革」考古学研究会例会委員会編『シンポジウム記録2 国家形成過程の諸変革』 2000年
- ④ 平井典子「備前・備中」伊丹 徹編『YAY! 弥生土器を語る会20回到達記念論文集』 弥生土器を語る会 1996年



a 遺跡遠景 (西から)



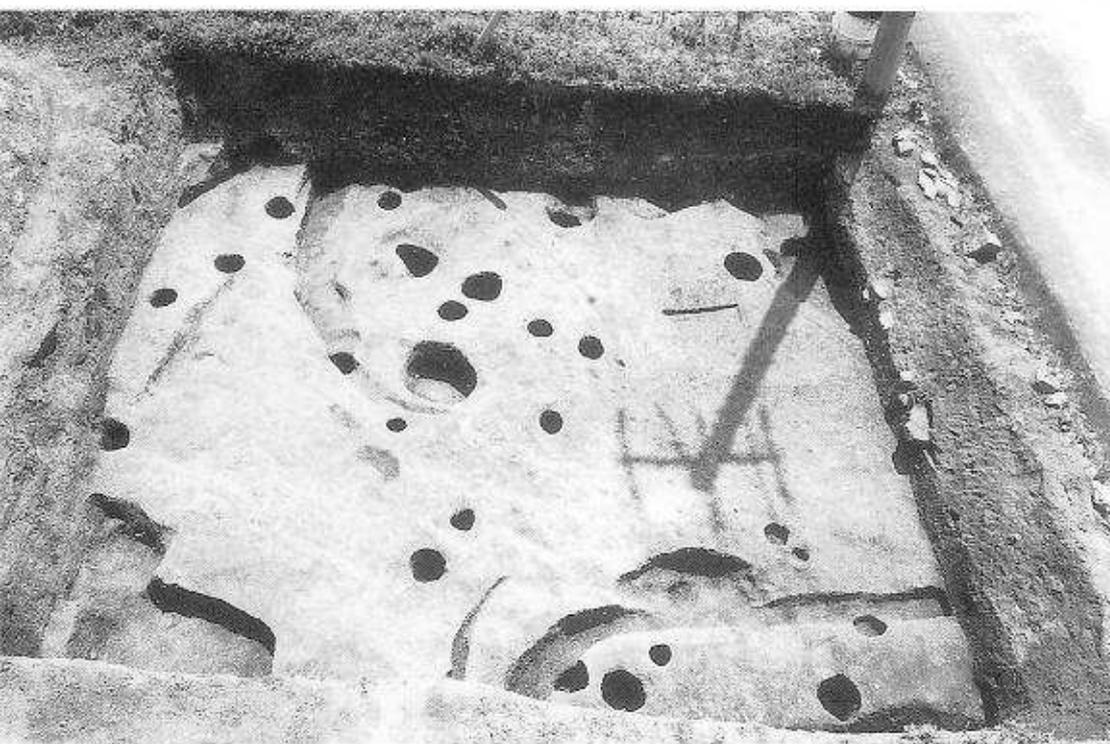
b 遺跡遠景 (北西から)



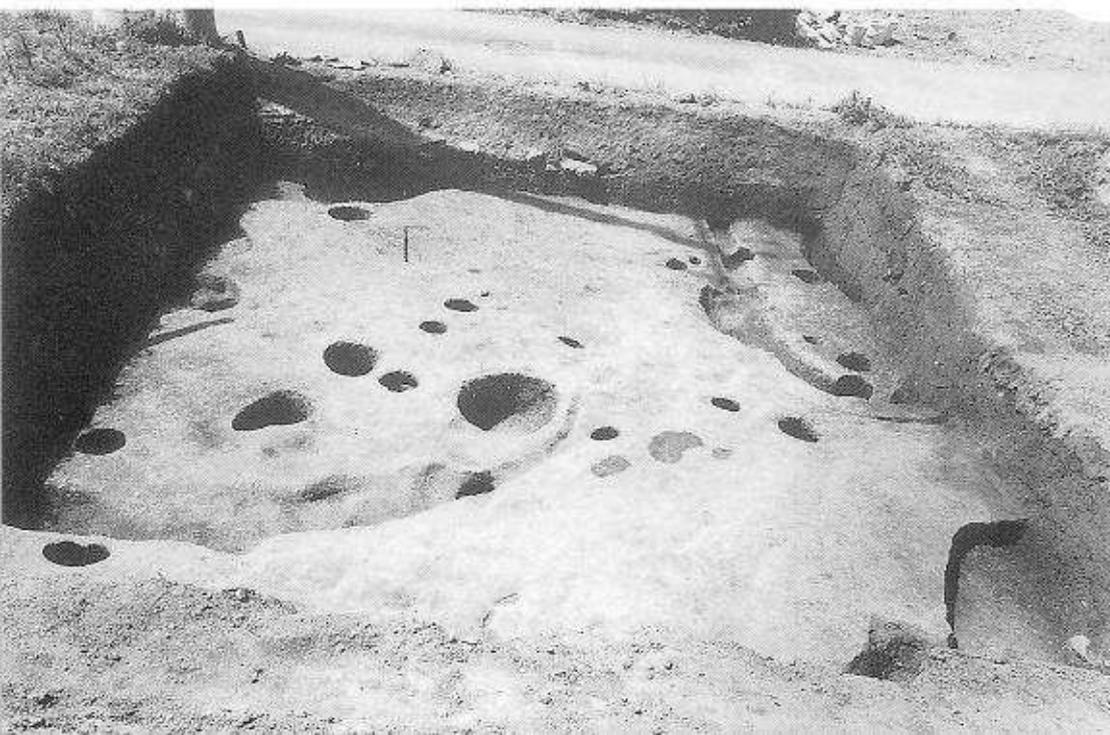
c 遺跡遠景 (南東・
牛の皮城跡から)



a 調査前全景(西から)



b 調査後全景
(北西から)



c 調査後全景
(北東から)



a 南東壁土層（北西から）



b 北東壁土層（南西から）



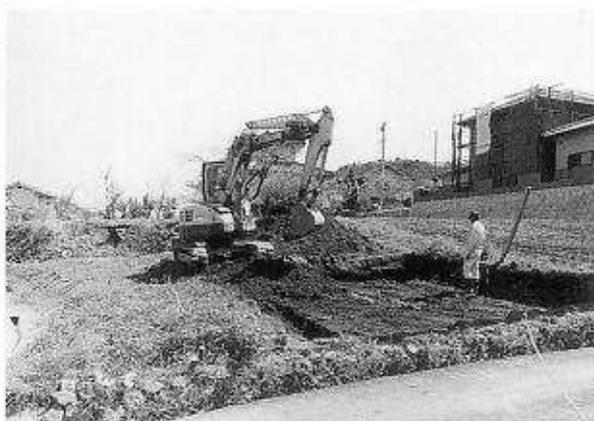
c 北西壁土層（南東から）



d 壺I出土状況（北西から）



e P1土層（南東から）



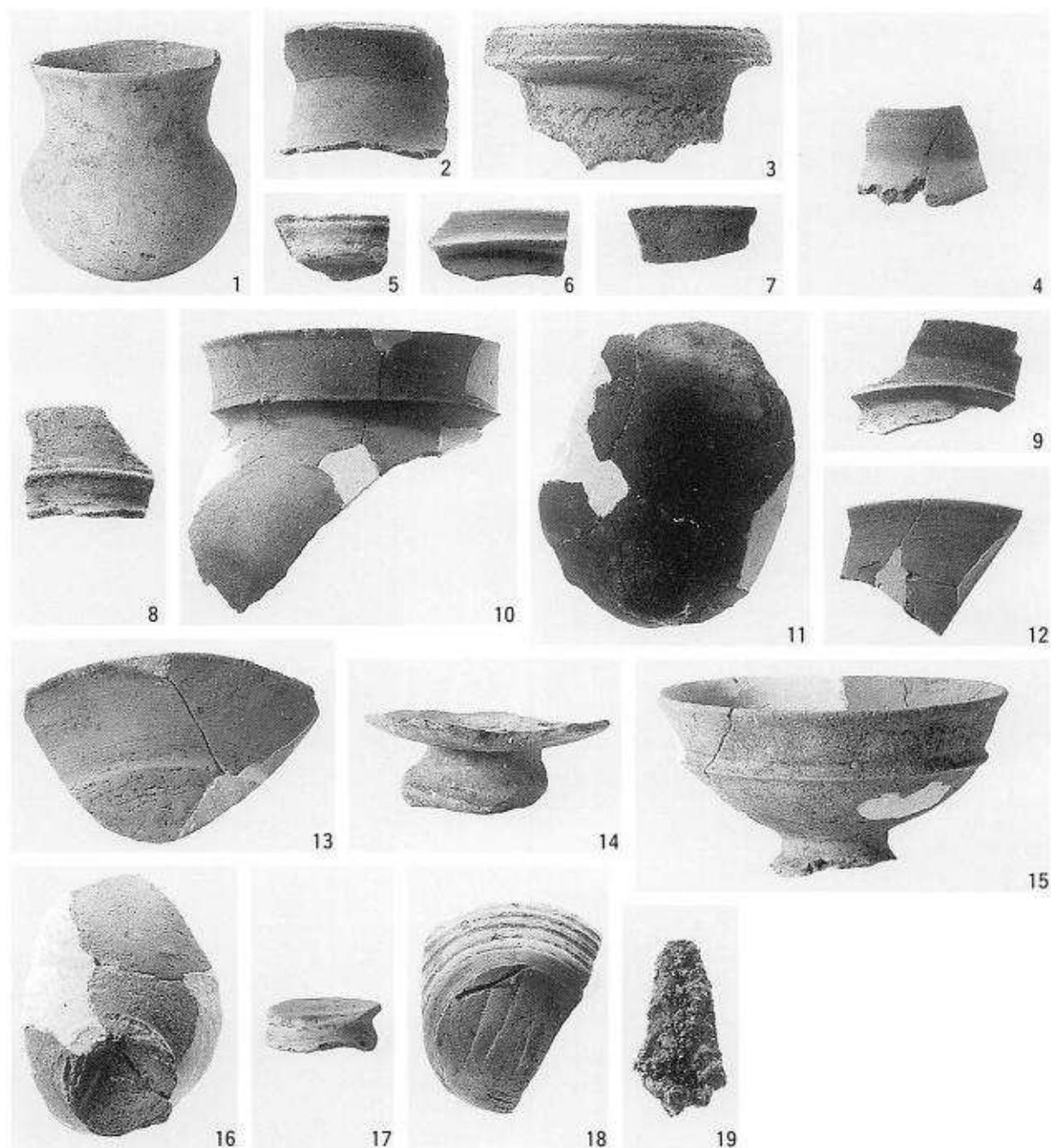
f 作業風景（西から）



g 作業風景（北東から）



h 作業風景（北東から）



出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	そがわいちごういせき							
書名	曾川1号遺跡							
副書名	大町地区防火水槽設置事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第13集							
編著者名	梅本健治							
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室							
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8-49 TEL 082-295-5751							
発行年月日	西暦2005年2月28日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
そがわいちごういせき 曾川1号遺跡	ひろしまけん 広島県 みつぎふくふつぎんちょう 御調郡御調町 おほまじ 大字大町	34441	150	34° 31' 21"	133° 9' 50"	20040414 ~ 20040428	55	防火水槽の 移設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
曾川1号遺跡	集落跡	弥生時代後期・古墳時代中期	溝5条,土坑3基,性格不明の遺構3基,柱穴23個	弥生土器(壺・甕・高杯・低脚杯・台付鉢),土師器(壺),土師質土器(杯・碗),鉄器(用途不明品)		山陰系土器(甕)の存在		

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第13集
曾川1号遺跡
大町地区防火水槽設置事業に係る 埋蔵文化財発掘調査報告書
発行日 平成17(2005)年2月28日
編集 財団法人 広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室 〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号 TEL (082) 295-5751 FAX (082) 291-3951
発行 財団法人 広島県教育事業団 〒730-0011 広島市中区基町4番1号 TEL (082) 228-8451 FAX (082) 228-8441
印刷所 西日本印刷株式会社